

## 胃ろうの功罪と尊厳死

——終末期の選択 あなたはどこまで考えていますか？

長尾クリニック 院長・医師 長尾 和宏

超高齢社会が進む中、延命措置や終末期医療のあり方について関心が高まっている。中でも、この数年メディアで盛んに取り上げられ、論議を呼んでいるのが、高齢者への「胃ろう」の是非である。

胃ろうとは、病気や事故などにより、口から食事や水分がとれなくなった場合に、胃に小さな孔を開けて管を通し、外から直接胃に栄養剤を注入する治療法である。1970年代後半にアメリカで開発され、開腹手術せず、内視鏡で造設可能になったことから急速に普及してきた。日本の胃ろう患者数は、現在40万人以上とも言われ、その大半が老衰や認知症終末期を含む高齢者だ。

終末期における胃ろうの問題点はどこにあるのか、どうすれば尊厳ある穏やかな死を迎えることができるのか。

「平穏死10の条件」「胃ろうという選択、しない選択 「平穏死」から考える胃ろうの功と罪」などの著者であり、兵庫県尼崎市でクリニックを開業以来19年間、24時間体制で在宅の診療、在宅看取りに取り組む長尾和宏医師にお話を伺った。(会員 三浦早結理)

——マスコミ報道等で、胃ろうのマイナス面がクローズアップされるようになったせいでしょうか。本来の目的や役割をきちんと理解しないまま、否定する人も少なくありません。改めて、胃ろうの何が問題なのでしょうか。



長尾 和宏 氏

胃ろうは、胃に小さな孔を開けてチューブを通し、水分や栄養を補給する経管栄養法と呼ばれるもので、点滴や輸液と同じ人工栄養法のひとつです。もともとは、障害があって食べられないお子さんために開発され、脳血管障害の急性期や、筋萎縮性側索硬化症、パーキンソン症候群といった神経難病で

嚥下が難しい患者さんにとっても、生きるために不可欠な道具です。胃ろうを造ると、二度と口から食べられないと思っている方もいるようですが、これは大きな誤解です。たとえば、脳卒中の患者さんで、全身状態や嚥下機能が回復してくれば、半分は口から食べ、半分を胃ろうで補うこともできるし、最終的に取り外すことも可能です。胃ろうは本来、優れた人工栄養法であり、言わば生きて楽しむための「便利な道具」なのです。

ところが、日本では、いつの間にか老衰や認知症終末期で植物状態になったお年寄りへのいわゆる「延命措置」として多用されるようになってしまいました。しかも、一度胃ろうを造設してしまうと、たとえ家族が止めてほしいと言っても、容易に中止することはできません。口から食べられなくなった患者さんにとって、胃ろうは命に直結するもので、中止は、すなわち死を意味するからです。問題の本質は、胃ろうそのものの是非ではなく、その使われ方にあるのです。

——高齢者への胃ろうが増加する背景には何があるのでしょうか。

命を救うことを最善とする医師の使命感、病院の仕組み、国民皆保険制度などにも関わる様々な事情がありますが、もっとも大きな要因は、ひとことで言えば、医者への「訴訟恐怖」です。口から食べられなくなった患者さんが、胃ろうをしないで亡くなった場合、あとで家族から「何もしないで餓死させられた」と訴えられる可能性を医者は常に危惧している。死が間近に迫ってくると、それがたとえ老衰であったとしても、患者さんの家族は「苦しまずに最期を迎えさせたい」という思いと、「どんな状態でも少しでも長く生きてほしい」という思いの間で揺れ動くものです。事前に医師と十分に話し合い、納得した上で、いったんは胃ろうはしないと決断しても、気持ちが変ることはあるでしょう。よく「医者は、胃ろうが好きだ」と言われますが、本音を言えば、医者自身が同じ状況で胃ろうを選択するか問われたら、9割方は「ノー」と答えるし、私自身もやりたくありません。それでも医者が造設を勧めるのは、万が一にでも訴えられないように、とりあえず胃ろうをしておけば安心だと考えるからです。

——昨年6月、日本老年医学会が、高齢者の終末期医療やケアに関して、「胃ろうや人工呼吸器などの設置を差し控えたり、治療の撤退もあり得る」とするガイドラインを発表しました。これによって、今までの流れにある程度、歯止めがかけられるのでは。

確かに、一定の要件を満たせば、医学会は止めてもいいと言っている。これまで、一分一秒でも長く生かすことを至上命題としてきた医学会において、人工栄養の撤退を選択肢に含めたことは、画期的な転換と言えるでしょう。しかし、これはあくまでもガイドラインであって、法的に担保されているわけではありません。先ほども言ったように、人工栄養だけで命をつないでいるお年寄りにとって、胃ろうを中止することは、死に直結する

ことです。法的な担保がない以上、罪に問われる可能性があるのですが、家族に要望されても「では、止めましょう」というわけにはいきません。法的担保がない限り、そう簡単に現場の流れを変えることはできないのではないのでしょうか。

——医療の進歩によって、多くの命が救われるようになりました。その反面、意識のないままベッドに横たわり、ただ生かされていることに疑問を感じ、延命治療を望まない人が増えているのでは。

たとえば、食べられなくなっても自然に見守る、胃ろうであるなら中止する。つまり、人為的な操作を加えずに、ゆっくりと衰えて、自然に死を迎えるようにする。例えるなら、植物が枯れていくような自然な死。それが、いわゆる尊厳死、平穏死です。私が日々接している患者さんたちの多くも、「延命治療は絶対にしないでほしい」「できれば自宅で静かに逝かせてほしいと」望んでいます。でも、今の時代、自然で穏やかな死を願っても叶わないのが現実です。実は、1970年代以前は、尊厳死は当たり前前のことでした。死は、主に自宅にあったし、地域にあった。ところが、1970年代から病院の世紀が始まり、医療が高度化し、死が病院に押し込められるようになりました。そして、1976年を境に在宅死と病因死の数が逆転し、今は死を迎えるのは8～9割病院です。

今の40～50代以降の世代は、病院で死を迎えることが当たり前となり、自然の死というものを間近に見ることも、学ぶ機会もなくなった。だから、死を前にすると、最高の医療を受けさせることが親孝行だと思っているようです。最高の医療とは、つまり胃ろうや延命治療です。皮肉にも、親が望む「平穏な最期」をさまたげているのは、実は家族や子供だったりする。私は、最期は延命医療から解放してあげることこそが、子供から親への最高のプレゼントではないかと思っています。

——自分が望む最期を迎えるためには、何が必要なのでしょう。

死が間近になった時、本人も家族も胃ろうを含めて延命治療を望むかどうか、選択を迫られることとなります。特に老衰や認知症の終末期になり、自分で意思表示ができなくなれば、その選択を家族や成年後見人などに委ねざるを得ません。家族が判断に迷わないためにも、自分自身がどのような最期を迎えたいのか、是非とも「リビング・ウィル」を表明しておいてほしいと思います。「リビング・ウィル」とは、元気なうちに延命措置に関する自分の意志を書面に残しておくものです。日本では、「日本尊厳死協会」に入会すると、意思表示が可能で、さらには、終末期になったとき、自分が何を望むのかをご家族とも日頃からよく話し合い、記録に残しておくことをお勧めします。

ただし、「リビング・ウィル」にも、現在のところ法的な

担保はありません。今の日本では、極端な話、120歳まで生きた人が、もっと長く生きたいから、人工透析や胃ろうをしてほしい、人工呼吸器もつけて、一秒でも長く生かしてくれと言えば、それは尊重されますが、何も静かに死なせてくれと言っても、叶わない。「死のあり方を選ぶ権利」は保証されていないのが実情です。

人間としての尊厳を持って死を迎えるためには、「リビング・ウィル」にも、遺言書のように実効力をもたせる法的整備が必要です。

——法的側面から問題解決を図ると同時に、私たち一人ひとりが死に向き合う姿勢が問われているような気がします。

以前、認知症終末期の方の息子さんに、十分な説明と話し合いの末、胃ろうを造設するかどうか選択を求めたところ、「私は手を汚したくないので、先生が決めてください」という答えが返って来たことがあります。これを私は「死の外注化」と呼んでいます。この方に限らず、今は死と真正面から真剣に向き合おうとしない人があまりにも多い。胃ろうを選択すれば、「無理に生かしているのではないか」、逆に選択しなければ「自分が餓死させるんじゃないか」という不安感を抱き、自分の選択に自信が持てないから、死を医者の手で安易に委ねてしまう。その方が気が楽だからです。そういう人の中には、一流企業のエリートもいれば、ジャーナリストもいます。いわゆるエリートと呼ばれる方でも、生死の選択を先送りしたり、自己決定できないのが実情です。これは深刻な問題です。果たして今、どれだけの人が、自分や家族の死についてきちんと考えているのでしょうか？

肝心なのは、医師の意見やメディアの報道を鵜呑みにするのではなく、自分の頭で考えることです。胃ろうについても、リビング・ウィルについても、もっと勉強して正しい知識を持ち、理解を深めてほしい。その上で、何が正しいか、どう選択するか、自己決定してください。老いや死は、誰にでも必ず来る自然の摂理です。対する医学・医療は、アンチエイジングであり、常に相反する理念です。それに折り合いをつけるのは、自分自身でしかありません。

私は病院の医療を否定する気はありません。事実、医学・医療の進歩で、多くの病気が治るようになりました。しかし、老化は治ることのない病気です。特養などの施設に行けば、植物状態になってもただ生かされているように見える高齢者が大勢いますが、これは死について、日本人が正面から論じることを先送りしてきた結果です。意識もないまま寝たきりの高齢者を見て、人権が尊重されていると考える人もいれば、むしろ人権が損なわれていると感じる人もいます。どこまでが必要な延命なのか、明確な線引きはできません。だからこそ、一人ひとりが、命や死について真剣に向き合い、議論を深めて行くべきではないのでしょうか。